

福山大学 大学教育センター 大学教育論叢  
第2号(2015年度) 2016年3月発行

タイの大学入試制度  
—「分を知る」社会における公平性—

牧 貴愛



# タイの大学入試制度 —「分を知る」社会における公平性—

牧 貴愛\*

University Entrance Examinations in Thailand - Equity within “*Boon tham kam taeng*”

Takayoshi MAKI\*

## ABSTRACT

Intense competition in university entrance is a defining characteristic of higher education in many countries, especially those that are affected with diploma disease. Thailand is no exception. Luxurious cram schools, *rongrian kuat wicha*, are pervasive and overflow the country. This paper aims to describe the current university entrance examination in Thailand by analyzing related documents and supplementary interviews with stakeholders. The analysis shows that, in university entrance examination, much more opportunities are provided for those who have than those who do not have. Such inequity in entrance examination in Thailand can be understood by the concept “*Boon tham kam taeng*” which means “your current status is due to your karma.”

キーワード：タイ，大学入試，公平性

## 1. はじめに

タイにおける大学入試は、高校生、そして、その家族にとって人生の一大イベントである。筆者の聞き取り調査に応じてくれたタイの高校生によれば、大学入試を控えた高校3年生の一年間は「サッカーやチアリーダーなどのクラブ活動を通じて楽しい学校生活を送った」という受験とは無縁の思い出であったり「とても楽しいとはいえない、慌ただしく、これまでにないプレッシャーを感じた」という辛い思い出として残ったりしている。いずれにせよ、タイにおける大学入試は、日本や広く「学歴病」に罹患しているアジア諸国における大学入試と同じように、人生の岐路の一つであることに違いはない。タイの大学受験がいかに加熱しているかについては、たとえば、大学入試対策を行う予備校の規模からうかがい知ることができる。予備校は「ロングリアン・グワット・ウィチャー (*rongrian kuat wicha*)」<sup>1</sup>と呼ばれている。「ロングリアン・グワット・ウィチャー」とは、学校を指す「ロングリアン」と、詰め込むといった意味の「グワット」と教科を指す「ウ



写真 著名な予備校の高層ビル  
(筆者撮影)

\*大学教育センター非常勤講師・広島大学大学院国際協力研究科准教授

「イチャー」という3単語からなり、直訳すれば「教科を詰め込む学校」すなわち試験対策を講じる予備校といった意味になる。従来は、バンコクの中心部、チュラーロンコーン大学の裏手にあるサヤーム・スクエアや、タマサート大学があるラーチャダムヌン通りに集中していたとされる（尾中 1991 : 310）。近年は、高架鉄道（スカイ・トレイン）や地下鉄の開通に伴い、バンコク全域に広がっている。著名な予備校は「〇〇先生」という著名な講師の名前を冠していることが多く、筆者が知るタイ人の大学院生にタイの予備校について尋ねたところ、すぐさま「〇〇先生」という答えが返ってきた。その予備校は、バンコク都内のスカイ・トレインのパヤタイ駅（サヤームスクエア駅から北方に3駅目）の近くにあり、交差点に面した高層ビル丸ごとであるという。これは、一つの事例に過ぎないが、予備校1校が高層ビルを所有しているというのは、日本の大手予備校を連想させる。同予備校の経営形態は、たとえば、化学を専門とするA予備校、物理を専門とするB予備校とタイ語を専門とするC予備校、社会科学を専門とするD予備校といった単一教科を専門とする予備校が集まり、グループを組んでいるネットワーク型とも呼びうるものである。母体となっているのは理系科目の予備校であるが、そのネットワーク校は、文科系科目を専門とする予備校も含まれている。また、同校の授業は、録画された後、地方の分校（サテライトの学習センター）で配信されるなど全国展開している。

THAI PUBLICA ウェブサイトに掲載されている情報によれば、タイにおける予備校数（2013年度）は、バンコク都内487校、バンコク近郊のノンタブリー66校、ロブプリー53校、アユタヤ42校、東北部のコンケン62校、北部のチェンマイ59校であり、いわゆる銘柄大学が集中するバンコクや、地方の中核的な大学が所在する地域を中心に広がっている。ちなみに授業料は学期当たり約3万バーツ（約11万円）と言われている。こうした授業料を支払うことができる中間層の増加も、近年、中進国となったタイの大きな特徴の一つであろう。加熱した受験競争と比例するように、タイにおける大学の量的な拡大、高等教育機会の拡充は、1970年代以降、急速に進められてきた。1971年には、無試験で入学できる公開大学であるラームカムヘン大学が開学したり、1978年には同じく無試験かつ通信教育の形態をとるスコタイタマティラート大学が開学したり、1984年には、地方の教員養成の主翼である教員養成校が総合大学化したり、2005年に工科大学が工科大学へと昇格したり、高等教育機関の量的拡充が図られてきた。2010年の高等教育機関の在学率は46.21%であり、トロウの整理によれば、マス型の段階にある<sup>2</sup>。高等教育機関別の在籍者の割合を見ると、国立大学60.1%、国立公開大学25.9%、コミュニティ・カレッジ0.6%、私立大学13.5%であり、国立大学のシェアが大きい（鈴木・カンピラパーブ 2012 : 85~88）。タイでは、いわゆる伝統のある銘柄大学に人気集中する傾向が強く、ある銘柄大学の特定の専攻は、定員二百数十名をめぐって二万数千人が受験するという、日本とは比べものにならない高倍率の受験競争が展開されている。しかしながら、銘柄大学だからといって教育の質が高いということではない。「有名である（mi chu siang）」かどうか銘柄大学であるか否かを分けるところが大きい（尾中 1992 : 117）。これはタイの社会構造の中には、いわゆる学閥的なものが存在していることを示している。実際、2005年の統一入試

（admission）第一期生となる高校3年生、4名のドキュメンタリー映画である「365 wan tam chiwit dek ent / Final Score」<sup>3</sup>の中では、ある高校の吹奏楽部の出身者が大学入学試験の面接試験時に、吹奏楽部の何期生であるかを告げると、面接官から私は何期生と発言するシーンがある。また、就職に際しても、どこの大学出身であるか、といった「横の学歴」が幅をきかせている<sup>4</sup>。

タイでは、1999年に同国の教育の根本理念を明示した「国家教育法」が制定され、同法に基づき教育の質の向上を目指した教育改革が推進されている。大学入試制度についても、従来の筆記試験による一度きりの試験から、高校の学業成績、2回の受験機会がある筆記試験の導入など、より公平・平等な制度へと改革が進められている。しかしながら、本稿の副題に示した通り、タイは、自らの立場（分）をわきまえることが求められる「分を知る社会」である<sup>5</sup>。タイでは、目上の人を呼ぶ際には「ピー」、目下の人には「ノーン」を名前の前につけて呼ぶことが多い。こうしたある種の上下関係（seniority）は、タイ社会が、依然として、ヒエラルキー的な社会構造を有していることを端的に示すものである。このヒエラルキーは、タイ国民の大多数が信仰する上座部仏教の輪廻転生観にルー

ツがあり「あなたが現在置かれている社会的地位は、前世の業によっている（Boon tham kam taeng）」<sup>6</sup>という考え方によって支えられている。この考え方を大学入試制度に引きつけると、銘柄大学への進学を果たしうるのは、それなりの分（立場）にある者であり、進学を果たせ得ないのはそれなりの分（立場）がないからということになる。タイの大学入試制度は、こうしたタイ社会の伝統的なヒエラルキー構造の中で、いかにして公平性・平等性を確保しえているのであろうか。このような問いを念頭に置いた上で、タイの大学入試制度の有り様を見てみよう。

## 2. 高校3年生の日常

### (1) 中等教育の位置

タイの学校体系は、図1に示すように日本と同じように6-3-3の単線型に近い。9年間の義務教育を経て、後期中等教育段階で、大きく普通科の高等学校と職業科の高等学校に分岐する。後期中等教育段階の在学者数とその割合（2013年度）は、215万7,937人（78.6%）であり、普通科が144万9,183人（52.8%）、職業科が7万8,754人（25.8%）である<sup>7</sup>。本稿では、12年間の初等・中等教育を修了した普通科の高等学校の生徒が、大学に進学するために受験する大学入試について紹介する。なお、読者が持っている一般的な中等教育のイメージと異なるのは、タイの中等教育の場合、中学校に相当する前期中等教育と高校に相当する後期中等教育は別々の学校として存在するのではなく、いわば中高一貫校的なものとして存在している点である。しかしながら、入学試験が存在し、同一校内の中学校からの「内部進学」以外に、一般入試、学区制選抜が行われている（野津2013：148）。ちなみに、タイの初等・中等教育は、課程主義ではなく、年齢主義を採用している。つまり、進級に際しては、中間試験や期末試験などが実施されるものの原則的に自動で進級する。ただし、幼稚園、小学校、中等教育学校といった教育段階の進学（接続）は、バンコクならびに地方都市の伝統校では、ある種の選抜が行われている（野津2013：148、船津2000）。その形態は、小学校の成績優秀者であったり、学校への寄付の多寡であったりする。学校への寄付の多寡については、大学入試以前の段階で、社会的あるいは経済的な要因によって、進路が、かなりの程度、決まってしまうというタイの伝統的な社会構造が垣間みえる。



図1 タイの学校系統図  
出典：日本タイ学会編『タイ事典』  
めこん、2009年、477頁。

### (2) 普通科の高校生の生活

現役の高校3年生ならびに大学入試で成功を収めた現大学1年生への聞き取り調査から得られた知見を手がかりに、普通科の高校生の一日を追ってみよう。

高校生の朝は早く、バンコクに居住している場合は午前5時～6時頃、地方に居住している場合は午前7時頃には起床し、自宅で朝食を取り、洗顔、歯磨きを済ませて、学校へ向かう。通学手段は、地方であれば自家用車で両親に送ってもらい、バンコクの場合は自家用車によって両親に送迎してもらうほか、スカイ・トレインを利用する場合もある。生徒によっては、送迎中の車内で朝食を取る場合や、大学の附属校に通っている生徒は大学の学食で済ませていることもある。現大学1年生は、受験生時代、午前5時に起床し、朝食をとったのち、予備校の宿題等に取り組むなどしていたようである。

学校に到着した後は、学校掃除を行った後、朝礼があり、学校毎に多少の違いはあるが8時30分から1校時が始まり4校時が終わると昼食の時間となる。昼食は、おおよそ1時間程度確保されており、

時折、友人と大学入試の話をするようである。現大学1年生は、高校2年生の頃から、少しずつ同級生との会話の中に、大学入試の話が出るようになり、高校3年生の頃は、どの大学の、何学部に進学して、何を専攻したいか、そのためにはどのような教科・科目を受験しなければならないか、といった具体的な話題へと変わっていったと回想していた。午後は3校時あり、およそ15時30分頃から放課後となる。

表2は、チュラーロンコーン大学教育学部附属高校の文科・数学系の時間割を訳出したものである。同校には、理科系と文科系があり、基礎教育カリキュラムに盛り込まれた8つの学習グループ、すなわちタイ語、数学、理科、社会、保健・体育、美術、職業、外国語（英語）が網羅されている。文科系は、文科・言語系、文科・数学系、文科・社会系の3つのコースがあり、それぞれのコースによって教科のコマ数が異なっている。また、水曜8校時には進路指導の時間が設けられている。

表2 文科・数学系高校3年生の時間割（2015年前学期）

	0校時 7:40~8:30	1校時 8:30~9:20	2校時 9:20~10:10		3校時 10:20~11:10	4校時 11:10~12:00	5校時	6校時 12:50~13:40		7校時 13:50~14:40	8校時 14:40~15:30	9校時 15:30~16:20	
月		第二外国語 数学 社会	英語	休憩 (10分間)	体育	体育	昼食 12:00~12:50	総合 英語	休憩 (10分間)	社会	保健		
火		英語	英語		第二外国語 社会 タイ語	ホームルーム		数学 数学※		数学	タイ語		理科
水		タイ語	社会		数学 数学※	第二外国語 社会 タイ語		英語		英語	社会		進路指導
木		理科	数学 数学 タイ語		職業	職業		英語		英語	選択科目		選択科目
金		社会	タイ語		タイ語	英語		第二外国語 数学 社会		第二外国語 数学 社会	理科		美術

注1：第二外国語は、フランス語、ドイツ語、中国語、日本語から選択し、それぞれの教室に分かれる。

注2：※印を付した数学は、文科・言語系と文科・社会系のための数学を指す。

注3：月曜の1校時、火曜の3校時、水曜の4校時、金曜の6校時は、コース毎に異なる教科を学習する。

出典：チュラーロンコーン大学附属高校のHPに掲載されている時間割（タイ語）を訳出し筆者作成。

平日の放課後の過ごし方は、個々人でまちまちではあるが、たとえば、ある高校生は、次の表3に示すように、月曜日と日曜日を除いて、平日の夕方、土曜の午前と夜間、予備校に通っている。この高校3年生は「チュラーロンコーン大学のような有名な大学の建築学部に進学したい」と考えている。そのため、水曜日の夕方4時間、建築学の補習も受けている。予備校で学習している教科を見ると建築学部の受験に必要な数学と英語に重きを置いていることがわかる。平日、週末を問わず予備校に通うことは、都市部の高校生に限ったことではなく、地方の高校3年生（理系）の場合も平日、週末ともに物理、化学、生物の予備校へ通っており、週末は午前9時30分~15時30分までの6時間弱を予備校で過ごしている場合もある。他方、週末のみという高校生もいる。いずれにせよ、タイ全土にわたって、地域毎に程度の差は見られるかもしれないが、冒頭に述べたように予備校での学習が盛んであることは事実である。

表3 ある高校生の予備校への通学状況

曜日	時間帯	学習内容	補習校の所在地
火	17:00~20:00	英語	サヤーム・スクエア
水	17:00~21:00	建築	ヤワラート(中華街)
木	17:00~21:00	数学	サヤーム・スクエア
金	17:00~20:00	英語	サヤーム・スクエア
土	19:00~21:00	数学	サヤーム・スクエア

出典：聞き取り調査に基づき筆者作成。

### (3) 特進クラスと進路指導

現大学1年生の出身高校では、文科系、理科系ともに、特進クラスが設けられており、通常クラスであれば一日あたり8校時を標準とする授業時数が、特進クラスは一日あたり9～10校時の授業時間が設けられていた。特進クラスは、高校1年次の成績をもとに選抜された生徒から構成されており、別途授業料の徴収が行われていたという。

先にみた高校3年生の時間割にもあったように高校には進路指導の時間が設けられており、銘柄大学への進学、一般的な大学への進学も視野に入れた手厚い進路指導が行われている。また、高校3年生を対象とした進路指導では、生徒が希望する分野・学部毎に部屋に分かれて、当該分野・学部に所属する大学教員や同窓生、当該分野を専門とする予備校の教員などを講師として招き、大学入試に関する具体的な講話を聞いたり、質疑応答を行ったりしていたとのことである。

こうした手厚い進路指導は、とくに、いわゆる伝統的な進学校において顕著に見られる。こうした動きは、1999年の「国家教育法」の制定以降、教育の質の向上をめざした教育改革が進められており、その一環として、学校教育の質を測定する学校評価制度が導入・実施されていることとも無関係ではあるまい。確かに、著名な大学への進学率の高さが、学校教育の質を端的に示すものであるとは一概に言えない。しかしながら、保護者や生徒の間では、大学進学率の一つの指標となっており、優秀な生徒が集まる要因の一つになっていることは容易に推測できる。また、そうした高校のランク付けのようなものが、高校よりも下の教育段階、すなわち中学校や、小学校、ひいては幼稚園といった教育段階における受験競争にも少なからぬ影響を与えていると考えられる。いい大学に行こうと思うのであれば、いい幼稚園に、いい小学校に、そして、いい中等学校に、という具合である<sup>8</sup>。こうした傾向は、「お受験」といった言葉がある日本の都市部と似ている。

### (4) 高校時代の思い出

文科系、理科系それぞれ現役合格を果たした現大学1年生に対して、高校3年生の頃を回想してもらった。文科系のシラパコーン大学考古学部が主体となり独自に実施する直接入試で一発合格を果たした学生は「高校3年生の生活はサッカーがとても楽しかった。英語が大好きだったので、英語の勉強も楽しかった」と回想した。また、理科系のマヒドン大学医学部の入試に合格した学生は「高校3年生の生活は、学校の活動、とくに、11～12月頃のスポーツ大会に向かっての日々の取り組みが楽しかった」と振り返った。また、これから大学進学を目指す後輩へのメッセージを尋ねたところ、シラパコーン大学の学生は「自分が好きで、得意な教科は何かをしっかりと考えて、その教科をしっかりと勉強すること。それから学校のクラブ活動と勉強の双方にバランス良く取り組むこと。時間をきちんと管理することが大切」と語ってくれた。また、マヒドン大学の学生は「まずは、自己を知ること。自己の実力を知り、好きな教科や将来どのような仕事に就きたいかを考えること。明確な目標を設定すること。そして、よく学び、よく遊ぶために適切な時間管理をすること」と語ってくれた。シラパコーン大学、マヒドン大学、いずれもバンコク都内に所在する銘柄大学である。このような大学への進学を果たす生徒(タイ語では *fua kathi* ココナッツミルクのように濃い頭の意味、転じて、秀才の意)は、スポーツと勉強の双方を楽しみ、いわば「文武両道」をこよなく愛し、有意義な高校生活を送っていたことがわかる。

## 3. 高校生と大学入試制度

タイの大学入試制度は、その実施方法によって、2つに大別することができる。すなわち、個々の大学が主体となり独自に実施する直接入試と統一入試である。高校生の視座から見ると、まず、第一希望の個々の大学の当該学部の直接入試を受験し、それに合格できなかった場合に、統一入試を受験し、それに合格できなかった場合は、私立大学または無試験入学が可能な大学への進学を検討するという具合に、高等教育機関への進学機会は大きく3回設けられている。以下、統一入試、直接入試の概要について見てみよう。

統一入試制度は、複数の大学が共通に利用することを目的に公的機関である全国学長会議 (AUPT) と NIETS (国家教育試験機構 National Institute of Educational Testing Service) が実施するものであり、正式名称は CUAS (Central University Admissions System)、通称は Admission である。個々の大学による直接入試は一般的な直接入試に加えて、高等教育への進学機会が限られてくる地方の大学入試で地元の生徒を優先するクォータ入試 (学区制入試)、スポーツ、芸術に秀でた生徒を優先したり、特定地域の出身者を優先したりする特別優先入試など様々な形態がある (野津 2013 : 160~161)。たとえば、シーナカリンウィロート大学教育学部には「暗闇を照らすダイヤ・プロジェクト (khrongkan phet nai tom)」という特別優先入試がある<sup>9</sup>。いずれの入試形態の場合も、概して GPAX、GAT、PAT、O-NET、9教科試験といった4つの成績ないし試験結果が考慮される。それぞれの具体的な内容は、次の通りである。

①GPAX (Cumulative GPA) は、高校3年間の平均成績。

②GAT (General Aptitude Test) は、大学での学修に対する受験生の適性を測る試験であり、読み・書き・分析力・問題解決ならびに英語の運用能力に関する問題が出題される。

③PAT (Professional and Academic Aptitude Test) は、志望する学部の専門性に対する受験生の適性を測る試験であり、大きく7種類の試験がある。それぞれ数学 (PAT 1)、理学 (PAT 2)、工学 (PAT 3)、建築学 (PAT 4)、教育学 (PAT 5)、芸術学 (PAT 6)、外国語学 (PAT 7) である。なお、外国語学は、フランス語、ドイツ語、日本語、中国語、アラビア語、バーリ語から選択することができる。

④O-NET (Ordinary National Educational Test) は、12年間の基礎教育課程を対象とした全国学力調査であり、年に1回実施される。従来、基礎教育カリキュラムに定められているタイ語、数学、理科、社会・宗教・文化、保健・体育、美術、職業・技術、外国語といった8教科を対象に試験が行われてきた。

⑤9教科試験は、直接入試の判定に用いられるタイ語、社会、英語、数学I、物理、化学、生物、数学II、理科総合についての試験 (2016年度より、従来の7教科試験から変更)。

以上の大学入試制度にかかる基礎情報を踏まえた上で、直接入試と統一入試それぞれの具体的な内容についてチュラーロンコーン大学の入試要項を手がかりに見てみよう。

#### (1) チュラーロンコーン大学教育学部の直接入試

たとえば、チュラーロンコーン大学の直接入試の場合、同大学学務局が管轄しており、大学のウェブサイトトップページの「学生募集」から入り、入試要項を閲覧 (PDF ファイルをダウンロード) することができる<sup>10</sup>。

たとえば、チュラーロンコーン大学教育学部の直接入試 (2015年度入学) の要領は、全11頁、全10項目から構成されており、各項目に記載されている内容を列挙すれば次の通りである。すなわち

(1) 出願資格としては、タイ国籍ないしタイ永住権を有していること、2014年現在中等学校6年生または中等学校6年間の課程を修了しているあるいはそれと同等以上であること、高等学校1年~3年前期までの5学期間の成績の総合点 (GPAX) が2.00 (4.00満点中) 以上であること。すでに修了している場合は6学期間の成績の総合点 (GPAX) が2.00 (4.00満点中) 以上であること。品行方正であり、大学での学修に専心する志があり、大学の学則等に従って行動できること。(2) 教育学部の専攻名、(3) 専攻毎の募集定員の一覧表、(4) 出願にあたっては第一希望のみ出願ができること、(5) 選抜スケジュール、(6) 出願にかかる手続きの詳細 (出願料100バーツ、審査料100バーツ、銀行の振込手数料)、(7) 出願手続きの完了確認 (同大学のウェブサイトに掲示される氏名、学籍番号などを確認すること)、(8) 選考試験の概要 (GAT、PAT、7教科試験の結果といった選考基準、筆記試験合格者の発表、面接審査の要領)、(9) 入学にあたっての条件、(10) 授業料等についてはチュラーロンコーン大学学則が定めるところによる。

また、入試要領の末尾には、専攻毎の GAT、PAT、7教科試験の配点と定員の内訳が記載された一覧表が添付されている。たとえば、幼児教育専攻であれば GAT20%、PAT30%、7教科試験のうち英



語 25%、タイ語 25%という配点で定員 15 名である。初等教育専攻（文科系）であれば、GAT20%、PAT30%は 7 教科試験のうち英語 20%、タイ語 20%、社会 10%という配点で定員 5 名である。

同学部の受験を検討する高校生が確認すべき情報は、もちろん上記全ての内容であるが、まず、確認するのは、選考の際に考慮される試験の種類（GAT、PAT、7 教科試験）ならびにその配点である。この直接入試の場合は、翌 2015 年 2 月 27 日～3 月 5 日が出願期間となっていること。そして、出願に先だって、NIETS（国家教育試験機構）が実施する GAT と PAT の第 1 回試験（11 月 22～25 日開催）を受験するとともに、7 教科試験（2015 年 1 月 17～18 日開催）のうち、選考の対象となる教科（英語、タイ語、社会科など）を選択して受験すること、といった必要な情報を確認する。なお、例年、大学・学部を選考に用いられる試験の種類が大きく変わることはないため、高校の進路指導等の時間を通じて、あるいは、予備校、高校生自身や両親との共同作業により、この種の情報の割り出しに早めに取り掛かり、受験に備えるのである。

### （2）チュラーロンコーン大学教育学部の統一入試を用いた入試

直接入試の場合と同様に、同大学学務局が管轄しており、大学のウェブサイトのトップページの「学生募集」から入り「統一入試（admission）」に掲載されている情報を見ると、入試要領の末尾に添付されている配点表を閲覧（PDF ファイルをダウンロード）することができる。この配点表は、直接入試とは異なり、学部・専攻名、O-NET、GAT、PAT、当該学部・専攻の定員数、昨年度の最下位の得点率（%）が示されている。たとえば、チュラーロンコーン大学教育学部幼児教育専攻の場合は、O-NET の成績は問われず、GAT が 20%、PAT 5 が 30%といった配点であり、入学定員は 10 名、最下位の得点率は 71.83%である。なお、統一入試による 2015 年度入学定員は、全学で 1,902 名であり、学部によって程度の差はあるかもしれないが、概して、全学の定員 6,500 名の三分の一が統一入試で入学し、三分の二は直接入試で入学することがわかる。

2015 年度入学を対象とした統一入試のスケジュールは、次の通りである。2015 年 5 月 6～17 日に、統一入試の要項の販売が全国で開始される。5 月 10～17 日の 1 週間が出願期間であり、その間（5 月 19 日まで）に受験料を支払うことになっている。その後、5 月 25～26 日の 2 日間、統一入試のウェブサイト上で、統一入試に用いる試験科目やスコア等を確認することになっている。翌 6 月 5 日、同ウェブサイト上にて、一次試験の合格者が発表される。一次試験に合格した者は、6 月 15～17 日に行われる面接試験と健康診断へと進むことができる。そして 7 月 1 日に、同ウェブサイト上で、最終合格者が発表される。なお、統一入試には、チュラーロンコーン大学などの 24 の国立大学が参加している。

### （3）統一入試スコアの算出方法

全国学長会議のホームページに掲載されている統一入試スコアの算出方法について取り上げておこう。統一入試スコアは満点が 3 万点であり、日本の大学入試に比べると、算出方法が複雑である。先述した通り、統一入試に用いる数値は、①GPAX、②O-NET、③GAT、④PAT の 4 種類である。

①GPAX は 6,000 点満点である。つまり、高校 3 年間の総成績が 4.00 である場合、6,000 点ということになる。たとえば、GPAX が 2.93 であった場合のスコアは 4,395 点となる。

②O-NET のスコアは 9,000 点満点である。O-NET の試験は（1）タイ語、（2）社会・宗教・文化、（3）英語、（4）数学、（5）理科、（6）保健体育、美術、職業・テクノロジーの 6 つに分けて試験が実施される。それぞれ 1500 点満点であり、（6）のみ 3 教科で 300 点満点である。たとえば、それぞれの試験の成績（100 点満点）が、63 点、75 点、71 点、81 点、87 点、240 点（300 点満点）だった場合、63 点～87 点までの 5 教科については 15 を掛けて、240 点には 5 を掛けて、それらを足し併せて合計点を算出する。この場合、6,855 点となる。

③GAT（300 点満点）と④PAT（300 点満点）は、学部・専攻によって配点異なる。たとえば、ある工学部は GAT15%、PAT 2（理科）15%と PAT 3（工学）20%の配点であると想定してみよう。こ

の場合 GAT と PAT 2 がそれぞれ 4,500 点満点、PAT 3 が 6,000 点満点ということになる。それぞれのスコアが 265 点、210 点、250 点だった場合、それぞれ GAT と PAT 2 のスコアには 15 を掛けて、PAT 3 のスコアには 20 をかけて、算出する。それぞれ 3,975 点、3,150 点、5,000 点となる。

以上の①～④を通して、算出したスコアをまとめたものが表 4 である。最終得点率は 77.9166% である。この最終得点率を手がかりに、希望する学部・専攻の昨年度の最下位の得点率を確認し、出願に備えるのである。

表 4 統一入試スコア算定表

	GPAX	O-NET							GAT	PAT		合計
		タイ語	社会・宗教	英語	数学	理科	保健体育・	PAT2		PAT3		
A大学	配点%	20	5	5	5	5	5	5	15	15	20	100
工学部	満点	6,000	1,500	1,500	1,500	1,500	1,500	1,500	4,500	4,500	6,000	30,000
	実際の点数	4,395	945	1,125	1,065	1,215	1,305	1,200	3,975	3,150	5,000	23,375
	得点率											77.9166

出典：全国学長会議「統一入試スコアの算出方法」（タイ語）に基づき筆者作成。

#### (4) 医学部の入試

タイの医学部の入試は、これまで述べてきた直接入試、統一入試とは異なる方式で運用されている。つまり、医学部に関しては、直接入試、統一入試では入学することができない。マヒドン大学医学部に合格した大学生によれば、タイ医学部コンソーシアム（Consortium of Thai Medical Schools）により 10 月に入学試験が実施される。一次試験の内容は、知性、医の倫理、論理的思考力、主要 7 教科試験、O-NET であり、合格すると二次の面接試験に進むことができる。この試験に不合格の場合は、医学部ではなく他の学部への進学を希望せざるえないことになる。

### 4. 公平性・平等性の確保をめざした大学入試改革

#### (1) 統一入試 (admission) 制度の改良

タイの大学入学試験制度は、1961 年に初めてカセサート大学と医科大学（現マヒドン大学）が共同で実施した入学試験を皮切りに、翌 1962 年には 5 大学（チュラーロンコーン大学、タマサート大学、医科大学、カセサート大学、シラパコーン大学）が共同で実施している。しかしながら、1966 年、チュラーロンコーン大学から従来の個々の大学ごとの直接入試に変更したい旨の提案が出され、当時の内閣が承認した結果、その年の大学入試は混乱を極めることになった。翌 1967 年、国家教育審議会の提案が内閣に承認され、再び、複数の大学が共同で実施する体制へと戻った。1973 年に、中央省庁に、大学庁が創設されたことにより、大学入試制度は、大きく、直接入試、クォータ入試、特別優先入試、統一入試の 4 つの仕組みを有することになった。しかしながら、当時の大学入試制度は、次の 5 つの問題を孕んでおり、改革が求められていた。すなわち、①特定科目のみが大学入試科目であったこと。従来の大学入学試験制度では、個々の大学の学部・専攻が指定した科目を受験するのみであった。つまり、とくに、高校生にとっては、大学入学試験の科目として設定されない科目を学ぶ意味を見出しがたいという問題を生んでいたこと。また、優秀な生徒は、特定の科目からなる「飛び級」試験を受験することにより、大学入学を果たす可能性もあり、中等教育課程の形骸化を生んでいたこと。②大学によっては、一般教養科目の試験のみの場合もあり、必ずしも大学で学ぶ専門にかかる基礎的な知識（たとえば、理系の場合は、数学、理科といった教科がその基礎となる）が十分ではない生徒が入学していたこと。③受験者数が徐々に増加傾向にあったこと。④従来の制度では、大学・学部を選択すると同時に出願し、受験しなければならず、受験生とその家族に精神的な負担をかけていたこと（現在の統一入試では受験を終えた後、点数等を確認した上で、大学を選択する）。⑤ 4 月という短い夏季休業期間に、試験を実施することになっており、時間的な余裕がなかったこと、である。

以上の問題点を克服するために、1999 年の教育改革を契機として、①前期・後期中等教育課程あるいはそれと同等の課程における成績を入学試験において配点 10% とすること。②主要教科または専門

教科の配点を90%とすること。③上記②の試験は年2回受験することができることとし、入試試験にはいずれか高い得点を用いることができること。また、その得点は2年間有効とすること、といった改善策が講じられた。しかしながら、①試験を2回受験することができるようにした結果、従来と同じように、受験生の肉体的、精神的負担が継続したこと。②10月の入試に間に合うように、高等学校の授業が進められるため、教育課程の形骸化を招いていること。③入学者を選抜(khat luak)するといった意味合いが強く、前期・後期中等教育段階の成績があまり考慮されないエントランス方式であること、といったさらなる問題が生じてしまった。

2006年から①公正・公平性、透明性を確保するために入学者を受け入れる(rap khao)アドミッション方式へ改め、②GPAX(10%)、GPA(20%)、O-NET(35~70%)、A-NET(0~35%)の配点方式を導入した。しかしながら、①各学校の教育評価の基準をめぐる論争が起ったこと。②統一入試で用いる成績、試験結果の配点の適切性が担保されていなかったこと。③A-NETの試験が年1回しか開催されず、生徒が出願し損ない1年待機せざるを得ないという問題が起ってしまった。

2010年以降は、以上の諸問題を踏まえて、先述の通り、①高校3年間の平均成績であるGPAXが20%、②基礎教育カリキュラム8教科に関する試験であるO-NETが30%、③大学での学修に対する受験生の適性を測るGATが10~50%、④志望する学部の専門性に対する受験生の適性を測るPATが0~40%という配点方式が採られている。しかしながら、2016年2~3月の試験からタイ語、数学、理科、英語、社会の5教科のみを対象とするという教育大臣の発言をめぐる議論が巻き起こっている<sup>11</sup>。統一入試の実施主体である全国学長会議からは、対象教科を変更する場合は、少なくとも3年先でなければならないといった意見が寄せられており、どのような方向に収束するか、タイの政局同様、先が見えない。

## (2) 大学入試の受験機会にみる平等性と公平性

現大学1年生に対して、大学に進学する機会、より具体的には、大学入学試験を受験する回数を尋ねたところ、大きく3回のチャンスがあることがわかった。すなわち、まずは、志望する大学・学部・専攻の直接入試を受験し、不合格になった場合は、統一入試を利用して、再挑戦する機会があること。さらに、不合格になった場合には、無試験で入学できる公開大学あるいは私立大学に入学するという道が開かれているということ、であった。つまり、タイにおける高等教育機会、いわば入り口における平等性は、学費をまかなえるという経済的な条件さえクリアできれば、制度的にかなりの程度、担保されていると見てよい。また、公平性といった点についても、条件的に不利な地域にある場合や国家的な必要性がある場合に限っては、クオータ入試、特別優先入試などの措置が講じられている点において、かなり限定的であるとはいえ、制度的に担保しようとしている。

## (3) 大学入学試験の受験準備をめぐる平等性と公平性

確かに、大学入試の受験といった一時点における平等性と公平性は、ある程度、制度的に担保されている。しかしながら、たとえば、2013年9月11日付のバンコク・ポストの記事「We educate unfairly, and favor the few」が鋭く指摘しているように「大学入学試験制度が中等学校の成績を加味することになったことで、生徒は予備校に通い続け、また、学校の教員は自宅などで個別指導を開き、生徒のニーズに応える」といった問題が生じたのである。本稿の冒頭で述べた通り予備校に通うにはそれなりの経済力が必要である。また、大学の直接入試を受験するためには、その大学までの交通費や宿泊費などの経費がかかる。たとえば、地方から銘柄大学の直接入試を受験しようと思えば、航空機で移動することになるし、そうした経済力がない家庭の場合は長距離バスやで鉄道で移動することになる。「お金がなければ、チャンスはない(No money, not much chance)」のである。直接入試を受験して失敗したら統一入試を受験して、それに失敗したら無試験大学に流れる、といった選択肢が見せる公平性や平等性は、受験生の家庭の経済的な豊かさを考慮すると表面的なもののように見える。

## 5. おわりに

本稿では、タイにおける大学入学試験制度をめぐる様々な事柄について、高校3年生、大学1年生への聞き取り調査などから得られた知見を手がかりに述べてきた。タイの大学入試制度は、クオータ入試、特別優先入試などの措置を講じたり、試験の機会を増やしたりすることで、公平性・平等性を担保しているように見えるが、概して、タイ社会のヒエラルキー構造の再生産に貢献しており、公平性・平等性を欠いていると言えなくもない。なぜなら、銘柄大学に進学できたり、そのために幼稚園や小学校の段階から受験競争に参戦できたりするかどうか、銘柄大学の直接入試を受験するだけの経済力があるかどうか、といった所与の分（立場）が、かなりの程度左右するからである。タイでは、1970年代以降、従来、中央省庁に勤務する官僚を養成するいわばエリート型であった高等教育から、国家開発に必要な人的資源を輩出するという名目のもとで、表面的な平等性と公平性を伴ったマス型の高等教育へ移行が見られた。しかしながら、そうした表面的な平等性・公平性は、結局のところいわゆる「分を知りそれに従う」<sup>12</sup>といったタイ的な能力主義からなる垂直構造の固定化を助長してきたのである。その極めつけが、無試験で入学できる公開大学の設置であろう。これにより表面的な平等性・公正性を備えた高等教育制度が整えられたのである。無試験入学という制度は、政府を構成する一部のエリートが選抜するのではなく「ドロップアウトを通じて内側からの自己選抜や自己排除を奨励」<sup>13</sup>した。つまり「達成かドロップアウトかの責任を個々の学生に委ね」<sup>14</sup>ることにより、タイ的な能力主義を完遂したのである。その結果、自律的な学修に取り組み続けた一握りのエリート卒業生と多くの高学歴失業者を生み出すことになったと言われている<sup>15</sup>。

タイの国立大学ならびにいくつかの私立大学の卒業式は、卒業生一人一人が、王族から卒業証書を授与されるという点で、日本の卒業式とは大きく異なっている。大学間に威信序列があり、それが大学の先に開けているタイ社会にまで深く浸透しているにせよ、最高学府を卒業した学生は、卒業式で王族に卒業証書を手渡されるまさにその瞬間、タイ王国を支える人材としての誇りを与えられるのである。タイの大学入試をめぐる公平性・平等性は、タイの伝統的なヒエラルキー的社会構造がもつ独自の論理の中で展開し、受けとめられているのである。

## 参考資料

### 【日本語文献】

- 馬越徹「アジアにおける学歴病と大学入試改革」『教育と医学』1987年、35巻5号、514～521頁。
- 海老原智治「タイの新しい Admissions 方式大学入試と日本語を受験科目に指定した大学専攻—2007年の『高等教育機関入学者選抜』(統一入試)の事例を中心に—」『国際交流基金バンコク日本文化センター日本語教育紀要』、第5号、2008年、145～154頁。
- 尾中文哉「タイにおける受験競争—インタビュー調査にもとづいて—」『社会科学紀要』第41輯、1991年、305～325頁。
- 尾中文哉「東南／東北アジア諸地域における受験競争—インタビューによる比較地域研究—」『社会科学紀要』第42輯、1992年、107～133頁。
- 尾中文哉「第15章 タイにおける接続改革—1999年教育法制定以後の変化が意味すること—」荒井克弘・橋本昭彦編著『高校と大学の接続—入試選抜から教育接続へ—』玉川大学出版部、2005年、333～344頁。
- 喜多村和之『現代の大学・高等教育—教育の制度と機能—』玉川大学出版部、1999年。
- キース・ワトソン「2 タイ大学の発展—西洋モデルと伝統モデルの融合—」P.G. アルトバック、V. セルバラトナム編(馬越徹・大塚豊監訳)『アジアの大学—従属から自立へ—』玉川大学出版部、1993年、91～134頁。
- 齋藤大輔「第七章 グローバリゼーションとローカルの場合におけるポピュラー文化の生産—タイ・ラップミュージックの事例から—」大谷裕文編『文化のグローカリゼーションを読み解く』弦書房、2008

年、132～151頁。

末廣昭『キャッチアップ型工業化論—アジア経済の軌跡と展望—』名古屋大学出版会、2000年。

鈴木康郎・カンピラパーブ・スネート「第五章 タイ—高等教育の大衆化と ASEAN 統合に向けた国際的地位の向上—」北村友人・杉村美紀共編『激動するアジアの大学改革—グローバル人材を育成するために—』上智大学出版、2012年、83～98頁。

高橋勝幸「ピサヌローク便り（その7）社会格差を生んでいるタイの大学入試」日本タイ協会『タイ国情報』第48巻第2号、2014年、32～55頁。

中井仙丈「第25章 変わりゆく大学—大衆化、法人化、国際化—」綾部真雄編著『タイを知るための72章【第2版】』明石書店、2014年、140～144頁。

日本貿易振興機構（ジェトロ）海外調査部、シンガポール事務所編刊『東南アジアにおけるインターネット普及状況と SNS 調査』2012年。

日本タイ学会編『タイ事典』めこん、2009年。

野津隆志「第6章 タイ—急増と変革の中等教育—」馬越徹・大塚豊編『アジアの中等教育改革—グローバル化への対応—』東信堂、2013年、144～163頁。

船津鶴代「分析レポート タイの教育改革の新展開—スマリーの告発と都市の選抜制度の変革—」『アジア研ワールド・トレンド』No.62、2000年11月、40～47頁。

ホームズ・ヘンリー、スチャーター・タントンタウィー（末廣昭 訳・解説）『タイ人と働く—ヒエラルキー的社会と気配りの世界—』めこん、2000年。

村田翼夫「第4節 タイ—大学の発展と入試制度—」中島直忠編著『世界の大学入試』時事通信社、1986年、233～254頁。

【ウェブサイト】特に記載がない場合の最終閲覧日は2015年6月30日

日本貿易振興機構・アジア経済研究所「アジア動向データベース」

国家教育試験機構（NIETS : National Institute of Educational Testing Service）<http://www.niets.or.th/>

全国学長会議（AUPT : Association of University Presidents of Thailand）<http://www.aupt.or.th/index.php>

チュラーロンコーン大学学務局 <http://www.admissions.chula.ac.th/>

シーナカリンウィロート大学入試情報 <http://admission.swu.ac.th/>

THAI PUBLICA「タイの教育危機（wikriti kansueksa thai）」<http://thaipublica.org/>

チュラーロンコーン大学附属高等学校 <http://www.satitm.chula.ac.th/>

バンコク・ポスト Sanitsuda Ekachai「We educate unfairly, and favour the few (11/09/2013)」  
<http://m.bangkokpost.com/opinion/369083>

ラームカムヘン大学「2012年度卒業生状況分析報告書」

[http://www.mis.ru.ac.th/policy/pdf/report\\_analyze2555.pdf](http://www.mis.ru.ac.th/policy/pdf/report_analyze2555.pdf)

ジョイ・ボーイ（Joey Boy）公式ホームページ <http://www.thewebflight.com/work/joeyboy/>

・Gmm Tai Hub Co.,Ltd 公式ホームページ <http://gth.co.th/category/films-and-series/>

#### 【タイ語文献】

タイ教育省教育審議会事務局編『タイ教育統計（2012～2013年度）』プリックワーングラフィック、2014年。

#### 付記

本稿に盛り込むことができた知見の多くは、現役の高校3年生、大学1年生ならびに筆者の勤務先（広島大学大学院国際協力研究科）に学ぶタイ人大学院生から提供を受けた。また、Ms.Pattanida Punthumasen 氏（元タイ教育省教育審議会事務局国際教育開発センター長）には、タイの大学入試をめぐる様々な事柄について、筆者の理解を助けて頂いた。ここに記して感謝したい。

本稿は、アジアにおける大学入試の多様化と高大接続プログラムの標準化に関する国際比較研究（平成27年度採択 科学研究費補助金 基盤研究（B）研究課題番号15H05197）の成果の一部である。

- 1 予備校は、教育省の認可が必要とされている。予備校の設置基準等の詳細は「仏暦2545（西暦2002）年 予備校の基準に関する教育省規則（rabiap krasuang sueksa thikan wa duai kamnot matrathan rongrian ekacyon phraphet kuat wicha Pho. So. 2545）」に定められている。
- 2 マーチン・トロウの高等教育システムの段階移行の詳細については、喜多村（1999：51）を参照。
- 3 タイで、2007年に公開された映画。「365 wan tam chiwit dek ent / Final Score」は、邦訳すれば「受験生密着365日」ということになるだろうか。これは、2005年の統一入試（admission）第一期生となる高校3年生、4名のドキュメンタリー映画である。本章冒頭で示した通り、高等教育機会の量的拡充が図られた結果、高等教育在籍率はマス段階に達している。しかしながら、いわゆる銘柄大学への進学をめぐる高倍率の受験競争が繰り広げられていることも事実である。こうしたタイの受験競争の実態をドキュメンタリー番組として収録した映画である。映画の中では、受験に臨む主人公の一人が母親と口論を続けるシーンや、家族全員で、パソコンに見入って試験結果を確認し、一喜一憂するシーン、金魚を飼う趣味を持った主人公の一人は水産業を学びたいと願うが、父は将来の就職のことを考えて、つぶしのきく学部に進学してほしいと願っていると伝えるシーンなど、大学入試が主人公のみならず家族にとっての一大イベントであることが伝わってくる。
- 4 末廣昭『キャッチアップ型工業化論—アジア経済の軌跡と展望—』名古屋大学出版会、2000年、289頁。
- 5 ホームズ・ヘンリー、スチャード・タントンタウィー（末廣昭 訳・解説）『タイ人と働く—ヒエラルキー的社会と気配りの世界—』めこん、2000年、61頁。
- 6 同上。
- 7 タイ教育省教育審議会事務局編『タイ教育統計（2012～2013年度）』プリックワンググラフィック、2014年、11頁。
- 8 タイにおける受験競争が小学校の段階から始まっていることや、タイの伝統的な社会構造を反映した高額寄付者（パトロン）の子弟を優先入学させるといった慣行がある。船津鶴代「分析レポート タイの教育改革の新展開—スマリーの告発と都市の選抜制度の変革—」『アジア研ワールド・トレンド』No.62、2000年11月、40～47頁に詳しい。
- 9 このプロジェクトは、1985年に、国家の発展に資する地域開発に率先して取り組む優れた教員を育てるというビジョンの下、シーナカリンウィロート大学教育学部を主たる実施主体として始まったものである。同プログラムで入学した学生は、毎学期1万3,000バーツ（約4万6千円）の奨学金を受給しながら、教員養成課程5年間の学修に加えて、地域開発に関する特別カリキュラムを学修し、卒業後、出身地の地域開発に率先して取り組む教員となることが期されている。なお、1975年から反共政策をねらいとする地域開発プロジェクトが実施されており、本プロジェクトはその一環として始まったものである。  
2015年度の同プログラムの募集要項を見ると、定員は30名であり、その内訳は、タイ国内治安部隊（Internal Security Operations Command）の4つの管区毎に、定員が決められている。4つの管区に含まれるいずれの県も、隣国と接している国境県である。このプロジェクトが開始された1985年当時、これらの国境県に迫りつつあった共産主義という暗闇を照らすダイヤモンドのように輝く教員の養成を企図したプロジェクトは、今日もなお、タイという国家の存立にとって極めて重要な役割の一端を担っているのである。
- 10 タイのインターネット普及率は26.3%で、利用者の年齢層を見ると15～24歳が全体の44%を占めている。つまり、中学3年生～大学院修士課程の2年生くらいまでの割合が最も高い。利用者の多くが高校生であるとは言い切れないが、インターネットの利用率は低くはない。日本貿易振興機構（ジェトロ）海外調査部、シンガポール事務所編刊『東南アジアにおけるインターネット普及状況とSNS調査』2012年、107頁。

- 
- <sup>11</sup> タイ通信社 (Sam nak Khao Thai) 「教育大臣、2015 年度から O-NET の試験科目数を 5 つに減じると発言 (Ro. Mo. Wo. So.To. yuenyan lotsop onet lua 5 klumsarawicha roem phi kansueksa 2558)」 <http://www.tnamcot.com/content/126570> (2015 年 10 月 17 日閲覧)
- <sup>12</sup> 同上。
- <sup>13</sup> キース・ワトソン「2 タイ大学の発展—西洋モデルと伝統モデルの融合—」P.G. アルトバック、V. セルバラトナム編 (馬越徹・大塚豊監訳) 『アジアの大学—従属から自立へ—』玉川大学出版部、1993 年、117 頁。
- <sup>14</sup> 同上、119 頁。
- <sup>15</sup> 村田 (1986 : 252) が指摘して久しいが、今日も状況は改善しているとは言い難い。たとえば、ラームカムヘン大学「2012 年度卒業生状況分析報告書」によれば、卒業生 (1 万 1,243 人) の 49.7% (4,865 人) は何らかの職に就いている一方で、42.9% (5,588 人) は無職かつ無就学である。ちなみに大学院等に進学した者は 7.32% (823 人) である。また、こうした激しい受験競争の末、いわゆるエリート高校生、大学生とは異なる人生を歩んでいる大学生もいる。そうしたある種、ユニバーサル・アクセス型に向かう高等教育の実態を皮肉った歌詞からなるラップ・ミュージックがヒットを飛ばした。タイにおけるラップ・ミュージックは、1990 年代頃から徐々に盛り上がりを見せ、2000 年に、その歌詞の内容が社会的に相応しくないという理由でラッパーが逮捕されて以降、ポピュラー音楽の一つのジャンルになったと言われている (齋藤 2008 : 141~142)。たとえば、ジョイ・ボーイ (Joey Boy) の『Sorry, I am Happy』に収められている「ヨック・ムー・クン (yok mue khun / Put Ya Hands Up)」の歌詞には「大学に入学して 6 年も経つのに卒業できない人、手を挙げて! 大学卒業したけど就職が決まらず、毎日ぶらぶら遊んでいる人、手を挙げて! 卒業して働いているけど、大学で学んだ専門と関係ない仕事に就いている。なぜ大学で学んだのか! と思う人、手を挙げて!」といった下りがある。タイにおける高等教育機会の拡充は、日本のそれとかなりの程度類似した、大学と就職の接続といった問題を突きつけている。